The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	四清運動をめぐる権力と村落
Author(s)	祁, 建民
Citation	アジア太平洋論叢. 2005, 15, p. 21-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100013
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

四清運動をめぐる権力と村落

祁　建民*

四清運動は中華人民共和国建国以降の中国村落における最大の政治運動であった。この運動に関するこれまでの研究は、主に中国共産党の文書資料に基づいて、階級闘争であることを前提にした観点から分析がなされてきた。階級闘争は確かにこの運動の中心であったことは間違いないが、その観点からでは運動内部における権力関係が明らかにできるとは言いがたい。本稿では村民の聞き取りに基づき、四清工作隊・貧下層中農協会・村民・村幹部などの動きとそれらの相互関係を分析し、国家権力（工作隊）と村落結合の各構成部分（村幹部・貧下層中農協会・村民）との関係を考察する。

1. 四清運動と調査村所在地方の状況

四清運動の本来の目的は毛沢東の階級闘争理論を徹底的に実行しようとしたところにあった。1962年９月27日に公表された「中共８期10中全会の公報」はこの理論を最初に述べたものである。

「転覆された反動支配階級はその滅亡に甘んじることなく、かれらは必ずその復活を企図する。それと同時に、社会にはなおブルジョア階級の影響および旧社会の慣習の力が存在し、一部小生産者の自然発生的な資本主義傾向が存在しているので、人民のなかにはなお社会主義化の改造をうけていないものがおり、かれらは全人口の数％にすぎぬ少数者であるが、一度機会があると、すぐに社会主義の

*　中国・南開大学歴史学院副教授, 日本学術振興会外国人特別研究員

道から離れて、資本主義の道を歩もうとする。」[1]

その後、中共中央は「当面の農村工作のなかでのいくつかの問題についての決定草案（いわゆる『前十条』）」（1963年５月20日）を提出し、四清運動の発動を決定した。そのなかで、つぎのように当時における階級闘争の事実を挙げた。

(1) くつがえされた搾取階級、地主、富農分子は、常に復活を企てており、機をみては反撃に転じて財貨を奪回し、階級的報復を行い、貧農、下層中農に打撃を与えようとしている。(2) くつがえされた地主、富農分子は、八方手をつくして幹部を腐敗させ、指導権を奪いとっている。一部の人民公社、生産隊の指導権は、事実上彼らの手に落ちている。その他の機関の一部にも、彼らの代理人がいる。(3) 地主、富農分子が、封建的な宗族支配を復活するための活動をすすめ、反革命宣伝を行い、反革命組織を発展させている地方もある。(4) 地主、富農分子と反革命分子は、宗教および反動的な土俗秘密結社を利用して、大衆をあざむき、犯罪活動を行っている。[2]

「四清運動」という概念については、「前十条」の第８条で「公社、生産大隊、生産隊がまじめに経理帳簿の点検整理（「清理」）、在庫の点検整理、財産の点検整理、労働点数の点検整理（以上の4つを「四清」という、後には「小四清」ともいわれた―筆者）を行なうよう、農民が切実に要求しているのに、目下、人民公社、生産大隊、生産隊には、ひろく『四不清』の矛盾が存在している。」そのため、「いちはやく『四清』工作の指導に力を入れ、同時に『四清』をもって社会主義教育を進める１つの新しい階段とした。」[3] と規定している。

中共中央の「農村の社会主義教育運動におけるいくつかの具体的政策についての決定草案（いわゆる『後十条』）」の中では、「このたびの運動は、階級闘争を中心として、５つの要点をもっている。即ち敵に対する闘争、社会主義教育、貧農下層中農の階級隊列を組織すること、『四清』、幹部の労働に参加すること。」[4] と述べ、また、中共中央の「農村の社会主義運動において提起されたいくつかの問題（いわゆる『二十三条』）」（1965年１月14日）においては「都市と農村の社会主義教育運動は、今後すべて四清と略称し、政治を清め、経済を清め、組織を清め、思想を清める。」（以上の4つを「大四清」という―筆者）[5] としていた。

聞き取り調査が行われた村落が所在する地方の状況はつぎの通りである。

寺北柴村がある河北省欒城県では、1964年１月20日に、石家荘地区党委員会は秦振国をはじめ141人の工作団を派遣し、「前十条」と「後十条」を宣伝した。同時に県は422人の宣伝工作隊を組織して、各人民公社を宣伝して回った。２月２日～５月19日の間に、「粗線条」的（大雑把な）「四清」を行い、4,694人を摘発、13万606元の現金と4万4,474斤の食糧を没収した。さらに９月27日からの１年間で、県の党書記曹彔をはじめとする385人の工作隊は趙県の３つの公社で「四清」を行った。つづいて1965年７月23日からは「細線条」的（緻密な）「四清」が始められた。中共中央農林工作部部長廖魯言（当時の仮名：魯元）は同県の方村に現地指導にあたり、県と公社の幹部総数2,580人中1,793人が批判対象になった。その後、四清運動の「展覧会」が開催された。[6] 1990年代に再調査した時にも農民はこの運動の様子をよく覚えていた。[7]

後夏寨村がある山東省平原県では、1963年12月、県党委員会が217人の幹部を三大李公社に派遣し、社会主義教育運動を試験的に行った。1964年５月に県貧農下層中農協会を設立、県内で300人あまりの幹部を組織し県内の四清運動を行った。1965年１月25日、全県の「小四清」が始められ、大隊と小隊の幹部が批判された。[8]「大四清」の時には、1964年９月には同県が350人の幹部を組織し、斉河県（山東省の実験場の１つ）の四清運動に参加させた。運動は激しく、斉河県では自殺者が出た。1966年にも8,000人の幹部が平原県で「四清」を行った。その8,000人は斉河県の幹部が主で、軍の幹部も加わっていたが、平原県の幹部はごく一部分が参加していただけであったという。[9]

馮家村がある天津市静海県では、1963年２月７日に公社党書記会議が開催され、「小四清」が開始された。５月27日～６月３日には県の三級幹部（県、公社、大隊）会議が開催され、四清運動を推進し、10月には県から280人の幹部が覇県の「四清」に参加した。その後、1965年１～３月に静海県で「四清」運動が再開された。しかし静海県では「粗線条」な（大雑把な）「四清」が行われていただけであった。[10]

呉店村がある北京市房山県では1963年10月に四清運動が開始された。1964年の年末から1965年の始めにかけて、貧農下層中農代表会と三級幹部会が開催され、

2,000人ほどが参加、6,000人が聴講し、県と公社の幹部の「四不清」問題が弾劾され、多数の幹部が処分された。また、数百人が反革命分子などとされ、数十戸が改めて地主・富農に認定された。[11]

中国共産党中央による四清運動発動の真意は階級闘争を展開し、打倒された地主・富農階級の反攻、復活を防止することにあり、重点を置くべき批判対象は、党内の搾取階級の代理人及び資本主義の道を歩む実権派であった。つまり幹部の「四不清」を清算することは運動の一部分あるいは一段階にすぎないのである。しかし、各県の闘争の成果をみてみると、中心になったのは幹部の汚職と賠償問題であったことがわかる。これは当時の農村の主たる問題が階級闘争ではなく、幹部と大衆との間の矛盾であることが反映されたものである。共産党は多くの農民を発奮させるべく、土地改革時には物質的利益をほのめかしたが、四清運動においては幹部の汚職問題の追究を行なわせたのである。

四清運動は、県レベルで行われたが、省と地区の指導部は当該県以外の多数の幹部を集中させ、１時期に１つの村で集中して運動を指導した。そのため人的資源は充実し、運動が徹底的に実施されることになった。上級から大勢の工作隊が集中的に村落へ派遣されて、運動が推進されたのである。

２. 工作隊の権威

工作隊は中共と国家権威を背負って村落内に入った。そのため工作隊は村落で最高の権威をもっていたと言える。中共中央の「農村社会主義教育運動中のいくつかの具体的政策についての決定（修正草案）」（1964年９月10日）の中では、つぎのような規定がなされた。「すべての社会主義教育を行ったところに、上から工作隊を派遣し、運動の全ては指導させる。工作隊の任務は、大衆を動員し、政策を遂行し、社会主義教育運動のすべての仕事を責任を持って完成することにある。」これは、国家権力が村落の既存の権力関係に大きな影響を与えたことを意味する。これに対し、農民は工作隊を上から毛沢東主席により派遣された人々として認識した。呉店村の張啓華はインタビューに以下のように答えた。

「問：四清は誰が主導したのか＝答：北京から10数人の幹部が来てやった。」

「問：四清のとき、（村の）幹部を誰が管轄したのか＝答：人民公社の幹部だ。」

「問：公社の幹部を誰が管轄したか＝答：北京から来た幹部だ。」

「問：北京から来た幹部とはどんな人か＝答：毛主席が派遣してきた人だ。」[13]

工作隊は村に入ると、村民を動員して元の村幹部を批判し停職させた、彼らは村幹部に代わって直接政治運動を指導し、村政を代行した。

寺北柴村では、まず２人の工作隊員が各家々への訪問・調査を繰り返し、1966年になって正式に運動が発動され、[14] 延べ40名の工作隊が村に来たという。[15] 工作隊は各生産隊に５人ずつが派遣された。村民によれば、工作隊の任務は「汚職、窃盗に反対し、投機に反対すること」であった。[16] 工作隊はまず貧下中農の代表を選び、同時に徐孟祥書記、劉文生大隊長、劉宝貴団書記など何人かを停職とした。[17] 特に書記の徐孟祥に対する批判は長時間に亘った。[18] 幹部が批判された際には村政を司るものがいなくなるが、村政は工作隊が代行した。[19] 工作隊は村を離れる前に全村民を集め、投票によって新幹部を選び、[20] 四清以前の帳簿、資料を回収した。[21]

沙井村には10数人の工作隊が、1964年の秋の収穫が終わったころに来て、1965年に戻っていった。その際は、数軒の家屋に２、３人ずつが分かれて住んだ。工作隊は北京市から直接派遣されて来ていたが、そのうちの１人は北京電機学校の党の書記であり、その他、生産隊長や解放軍の士官もいた。工作隊はそれぞれ青年担当、政法担当、帳簿監査、幹部の管轄などに分けられていたが、運動の中心は幹部批判であり、その幹部の追究はすべて工作組によって管理されていた。[22]

沙井村の場合、書記張麟炳が解任、村幹部は離村させられ、牛欄山（地名、順義県にある）で集中的に批判された。「上楼」（楼とは２階建て以上の家屋のこと。また「上楼」とは楼に登り、離村させられ上級の指定したところで批判されることを指す）させられ、そこで政策やその他の問題を学習し、何か問題であったのか明らかにされたのである。[23]

後夏寨村では、1964年に「小四清」が開始され、人民公社が中心となって運動を推進した。1965～66年の「大四清」の際は県の役人や解放軍の士官などが派遣された。[24] 四清工作団は公社に住んでいたが、工作団の下部組織である工作組は

村に住んでいた。当時、村は東隊・西隊の２つの大隊に分かれており、工作隊も二手に分かれ、それぞれ東隊・西隊を監督した。[25] 工作組は統一大会を開き、工作方法やどのように仕事を進めるかを指示し、[26] 紀綱紀粛正（整頓）を行った。[27] 工作組は大衆を組織して幹部を精査し、汚職が発覚した場合、弁償させた。[28] そして四清運動が終わった後も公社に視察組と呼ばれたものの１人が留まり、「四清」の成果を維持し、指導部を見守っていくこととなった。[29]

馮家村でも工作組が帳簿類を細かく検査した。[30] 村の幹部のひとり劉錫領は「独流の公社まで連れて行かれ何か月も批判された。」[31] 呉店村にやって来た四清運動の工作組は良郷県や北京市の幹部と大学生であった。[32]工作組は村に居住し、[33] まず各戸の財産や経済状況の様子を調べ、[34] 社員の幹部への不満を強めさせた。そのために社員に会計帳簿の照合や調査を要求させることもあった。[35] 工作組は村幹部張啓華１人だけを残して生産を管轄させ、他の幹部すべてを兵営に連行し、そこで１ヶ月余りの短期間に１人１人に対して審査を行った。[36]

以上の過程においては村落内の各種結合が国家権力に対抗するという姿勢は見られず、全て工作隊に従ったようである。例えば北五里舗村の張九東は厳しく批判され、書記を解任されたが、その理由として２つのことが挙げられた。１つは、生産隊の家畜を各戸に渡して飼育させたこと、もう１つは、隊のなかの荒れ地を約30畝ほど分配したことであった。そのため、四清運動が始まると彼は「資本主義の道を歩むものとされ、右派だとして批判された。」[37] 彼はインタビューに以下のように答えた。

「問：この２つのことを公社の幹部は知っていたのか＝答：家畜を各戸で育てさせたことは、上の方でそうさせたのだから知っていた。荒れ地を分けたことは、報告しなかったから知らなかった。…もし報告していたら、同意してもらえなかったと思う。」[38]

張九東は村民の利益のために、上級に報告せずに行動したにもかかわらず、四清運動のときには、村民は工作隊に従い、張を批判した。さらに張九東が語る。

「問：四清運動で批判されたのはこの2つのことか、１般の社員の態度はどうだったか＝答:批判されたのはこの2つのことだ。社員は工作隊に従い、土地を大隊のものにすることに同意した。というのは、もうその頃、社員の生活は好転し

ていたから。土地を分けたときには、社員はそれを支持したのだが」。[39]

四清運動はすべて工作隊によって指導された。村の権力を掌握、村民を動員して、村幹部を批判し、免職させた。その際、大部分の村落で幹部を村外に連れ去って審査を行った。多くの場合、北五里舗村の張九東と同様の過程が繰り返されたのである。このように国家権力と権威が村落内で強く作用していた。そのため、村落の人々は工作隊に従わなければならなかった。

四清運動は、公社以上の各級国家機関が大量の幹部を組織し、農村に対して集中的に実行した政治運動である。その最大の特徴は、一方的であることであり、完全に上意下達式に指導を進め、専ら農村の基層幹部を対象に行なわれた。工作隊は最高の権力を有し、村内では村民の許可を受けて村幹部に完全にとって代わって権力を行使した。級を越えた外部の国家権力が村落内で権威を直接発揮出来たことは、国家権力の強大さを物語ると共に、村幹部が国家に所属するものであることを物語っている。重要なのは彼らが国家権力の代表であり、決して村落の庇護者ではなく、その権力は国家から授けられたということであった。同時に国家権力は極めて容易に村落内の幹部と農民との間に介入しえたことを確認できる。しかし、国家権力が役割を充分に発揮するには村落内の一部勢力を利用すると共に、村民を刺激して、発奮させなければならなかった。そのため、貧農下層中農協会を組織して幹部の汚職腐敗を批判したのである。

3. 貧農下層中農協会

工作隊は村落で運動を発動するため、村落の内部事情に通じる者が必要であった。そのため村内出身の運動の執行者を貧農下層中農協会に組織した。工作隊は改めて農村における「階級隊伍」を整理したのである。「後十条」ではつぎのような規定がなされた。「貧農下層中農に依拠することは党の長期の階級路線」であり、「貧農下層中農組織の成員は土地改革と合作社の時期の貧農、下層中農を基礎とする。」「公社、大隊の一切の重大事は彼ら（貧農下層中農協会—筆者）と相談すべきであり、彼らに了解させなければならず、彼らに対して閉鎖的であるべきではない。」[40]「二十三条」の中では「貧協（貧農下層中農協会—筆者）を組織すれば、

富裕中農とその他の進歩を望む人は接近して来るであろうし、社会主義に対して動揺しているこのような人々を団結させることができる。」としていた。[41]

工作隊は貧農下層中農協会を組織して運動を進めたが、その時にはすでに権力を持っていた。寺北柴村の貧農下層中農協会主席劉孟山は幹部１人１人の履歴を整理し、厳しくチェックした。[42] 後夏寨村の馬天祥も、当時、貧農下層中農協会の代表だったので、大衆の意見を集めて幹部の状況を明らかにした。[43] ここから彼等が運動中にかなり大きな役割を担っていたことが判明する。各村の貧農下層中農協会のリーダーあるいは「積極分子」は以下に示す通りである。[44]

寺北柴村：劉孟山…貧農下層中農協会主席、四清運動の３年前に人民解放軍に参加し、ちょうど復員したばかりだった。
　李領群…貧農協会主席
　郝文成…貧農協会主席
後夏寨村：馬天祥…貧農代表、当時は党員ではなかったが、運動に積極的だった。「四清」後期に受け入れられて党員になった。
沙井村　：趙庭福…積極分子、解放前の保長
馮家村　：王海忠…貧農協会の主任、1952～57年タンク（装甲兵）部隊に入り、その後郵便局につとめ、1960年代に村に戻った
呉店村　：劉書（叔）玲（女）…貧農協会の主席

しかし、村民は、このような「四清積極分子」を自分たちの代表者と認めなかったし、評価もあまり高くなかったようである。彼らはただ幹部に対してのみ、意見を提出できる人あるいは「二流子」（ごろつき、遊び人）と認識された。貧農協会のメンバーについて、村民は以下のようにインタビューに答えている。
寺北柴村の場合：
「問：貧農協会はどのようにして生まれたのか、またどんな人が参加したのか＝答：工作隊が大衆と語らって、積極的な者を選んだ。」
「問：どんな条件で貧協の仕事に当ったのか＝答：幹部に対する意見を持っていたからだろう。」

「問：どんな意見か＝答：幹部が多く食べ、多く占有し、汚職、浪費をしているとの意見だ。」[45]

沙井村の場合：

元保長趙庭福は「積極分子」であった。工作隊は彼を利用して、彼を前方の主席台に座らせていた。運動の中で矛盾を利用して矛盾を解決し、工作隊に幹部を粛正させた。[46]

後夏寨村の場合：

工作隊は当初何人かの「二流子」を組織したが、「結局ろくでなしを組織しただけ」であった。それは村の一般の人々は敢えて云わなかったが、彼ら「二流子」は大胆に発言したからである。そのため運動が組織されてから彼らと離れられなくなったと言う。[47]

馮家村の場合：

四清運動時に幹部批判の先頭に立ったのは貧農協会の主任に選出された王海忠であった。[48]

貧農下層中農協会は当初から生産隊と公社の管理委員会に協力或いはそれらを監督する組織であり、村落内に２つの権力の中心が並立することを避けるため、正式な社、隊組織にとって代わらないことも規定されていたし、貧農下層中農協会のリーダーには手当が支給されなかったし、[49] その後も貧農下層中農協会は「監督権」だけを持ち、「決定権」はあたえられなかった。後夏寨村では、「四清」後、新たな幹部を選出すると同時にさらに貧協委員会を選出した。馬天祥と王会民が貧協委員会の主任であったが、馬天祥へのインタビューによれば、彼の仕事は主に「幹部が飲み食いや横領をしないかどうかを監督」することのみであり、「大衆から意見があったら、そうした意見を集めて党支部に反映させたり、当の幹部を捜して話合いを行った。…貧協は協力はしたが、決定権はなかったのだ。また貧協は、幹部が生産をうまくやるように協力した。」[50] しかし、このような組織はその後、次第に影響力を失っていった。国家は運動を発動するために村落内部の積極分子を利用したが、運動が終わると、このような人々はその権威を破棄させられたのであった。

貧農下層中農協会は国家が四清運動を発動する際の村落内での依拠すべき勢力

とされていたが、その中核をになったのは村落内全体の農民の代表者でも、全体の農民から選出されたものでもなく、幹部に対して強い不満を持っている一部の者か、積極的に発言する者であり、村民達自身ですら彼らを自分達の代弁者とは認めなかった。国家が運動において必要としたのは幹部の反対側に立ち積極的に意見を発表する人であった。一方で、運動における「積極分子」は国家権力を利用して、かつて自分を傷付けた一部の幹部を打ち負かそうとした。無論、幹部も貧農下層中農協会の人々もいずれも国家の意志、同時に工作隊の意見に従って事を進めたのであり、国家権力に服従していたのであるが、貧農下層中農協会の中堅は裏面では、この政治運動のチャンスに乗じて過去の怨みへの復讐を行っていた。

四清運動の中においては、工作隊が村民の意思を代表して幹部を批判したり、あるいは村民が幹部を支持して工作隊に反対した、という構図は形成されなかった。工作隊は村民の意思を確認せず容易に村幹部を更迭したし、一部の村民のみを利用して幹部を批判したのである。ここから、強大な国家権力及び村幹部と村民との間には断層が存在し、村落の中に国家権力が介入しやすかったことが明らかとなるのである。

4. 汚職摘発：農民の四清

清代半ばにおける郷地制と順庄法の実施以降、華北村落における紛争の多くの原因は村費問題であった。集団化以後も村幹部が管轄する財産が拡大し、幹部の汚職が増加した。中共中央は階級闘争としての四清運動を、農民の視点から幹部を批判する運動として認識した。貧協代表馬天祥は四清運動の原因について、「公社化以後いくらかの幹部の作風はよくなかった。多く食べ多くとった。汚職もあって、村には不満があった。」(51) と語った。

村民が最も関心を抱いたことのはこの点であった。四清運動（「大四清」）は、本来は農村の階級闘争を行い、汚職摘発はその一部にすぎないはずであったが、実際には農村での四清運動は「経済を清め」ることを第一とし、幹部の汚職追求に重点を置くものとなっていた。

馬天祥は「四清」の内容と順次について次のように認識していた。最初の「一

清」は経済を清めることで、幹部を自白させ、第２に組織や支部を粛正した。第３に政治の様相（現在は精神文明と呼ばれている。）を清めた。第４に思想を清めた。こうして旧い思想を清め、改め、新しい思想を打ちたて、社員を幸福にしようとしたのである。[52] とは言え、その中心は幹部の粛正であり、階級闘争までは至ることはなかった。

村民王建章が理解した四清運動は「幹部を清め、経済を清め、思想を清め、政治を清め、組織を清め」るという順番のものだった。その内容は汚職を批判するもので、「思想・経済問題が大きかった」という。[53] つまり、幹部を清めることと経済を清めることへの比重が大きかったといえよう。張啓華は、「四清」とは「汚職、賄賂、窃盗を正し、幹部の仕事を点検することだ。」[54] と話しているように、村民の目には幹部の汚職を粛正する「小四清」こそが四清運動の主たる内容として映っていたのである。各村の運動の様子は次の通りである。

寺北柴村での四清運動は「主に経済を清めた」。[55] 当時存在した10個の生産隊の隊長はすべて批判された。[56] その中でも、前党支部書記の徐孟祥と会計の趙球子が主な批判対象とされた。彼らは、「経済的に不明朗なことをした。主として経済面だ。大衆は彼に汚職の行動があったと思った」ため、批判されたという。[57] 郝全福はその時支部書記になったが、彼によれば、幹部は全員が参加し、全員が批判された。「主なものは汚職の摘発で、帳簿の検査の後、批判を受けた。」[58]

沙井村では、書記張麟炳と出納員張樹栄が主な追求対象になった。彼らの問題は汚職だった。[59] 特に会計が「粛正の重点対象」[60] とされ、清帳組（帳簿検査組）が組織された。会計を担当している劉振海がその対象とされた。[61]

後夏寨村では、四清運動によって書記の職を解かれた馬鳳山からの聞き取りによれば、工作隊は「大衆を立ち上がらせて」、幹部の汚職や浪費や飲食費などを調べた結果、飲食費に流用したものが多く、「浪費したものもいた」。[62] 同村の小隊管理員李敬唐は生活が苦しかったときに、すこしだけ食糧を横領した。これに対し、運動中、大衆は彼に対して不満を募らせ、意見を出して大会で彼を批判した。丁度この時、彼は息子が結婚したばかりであったし、「彼は自分も年を取り、年長者でもあるので、体面を失うようなことになってはよくないと思い、面子を重んじてこのことのために首を吊ったのだ。」と当時の生産大隊会計の馬会祥は話して

いる。[63] 李は5つの調査村の中で、四清運動での唯一の自殺者だった。村民によれば、実は、彼には大きな問題はなく、「生活が苦しかった時に、少しだけ食糧を取った」にすぎなかったという。[64]

馮家村では、四清運動の目標が「主として幹部の作風（仕事上の態度—筆者）の問題」であり、「生産隊長が自分では働かないで他人ばかりを働かせたり、自分の利益を貪ったりすれば、大衆はこれに不満をもって、幹部に意見を提出して批判した。」[65] 当時の幹部劉錫領によれば、彼自身「幹部だったので他のものより多少収入は多かった。仕事が多い分収入も多かった」のだが、結局、彼は幹部時代にごまかした公金を2棟の家を売って賠償しなければならなかった。[66] 四清運動時の大隊長郝開順によれば、1963年に水害が発生した時、救済の食糧が配布されたが、帳簿上の記録をはっきりさせないまま、利用したため、村の幹部がやめさせられたという。[67]

呉店村では、運動中、幹部は勝手にいろいろなものを利用してはならず、決算に不明瞭な箇所があれば担当者が交代させられた。不明瞭な箇所がなくなるまで点検させられた。[68] 彼らの問題は「トマトや茄子などを皆より多く食べた」[69] ことにあるとされた。当時の治保主任郭連によれば、四清運動は経済状況と「作風」を検査し、幹部たちを労働に参加させるものであった。[70]

1990年代の調査において、村民の王鳴鑾は「四清運動は正しいと思った、彼ら幹部は多くを食べ、多くを専有し、民衆の利益を侵犯していたのだから、あのように批判されるのは正しいと思った。」[71] と述べている。村幹部の汚職行為は今も村落で目立つ問題であるからこそ、このような発言がなされるのであろう。

幹部の汚職・腐敗の批判は、農民を動員し、運動に参加させるのに最も適したスローガンであるといえよう。帝政国家の官僚体制と清代以来の郷地制は官・民の分裂・対立を生み出した。中国の伝統的な政治文化において、貪官汚吏の打倒は人心を最もとらえやすい行動であった。四清運動もこの特徴を明らかに体現していた。農民にとっては四清運動の核心は幹部の粛正、汚職・腐敗の打倒であり、いわゆる階級闘争には関心が向いていなかった。そして工作隊も大衆を動員するためにこれをスローガンとした。解放以前、村費分担の不公平と村長の汚職こそが、村落内部における紛争の主たる原因であった。そして、村費をめぐる対立が激化

すると、村民たちは県城に告発に赴き、国家権力の介入を呼び込んだのであった。しかし、県は介入に対し、消極的であり、往々にして、「民が告発しなければ、官は究明してくれない」と言うべき状況となっていた。しかし、四清運動は国家権力側が積極的に村落内部の矛盾に介入し、村民に幹部の汚職を告発するように促した。国家権力による介入を村民たちは歓迎し、そのために四清運動は大規模な大衆運動になりえたのである。

汚職幹部の摘発が四清運動の主な内容であったことから、村落の内在矛盾の連続性が理解されよう。しかし、幹部への村民による厳しい糾弾には、もう１つの理由があった。すなわちそれは、人民公社体制において、幹部が国家の代理人として村民の不満を招いていたことである。

5. 国家政策を遂行したがゆえの「罪」：幹部の四清

人民中国成立以降、幹部は国家と村落との間で、国家権力の代理人として主要な位置付けを与えられることになった。政策遂行の過程で、彼らの存在は国家と村落との矛盾は村幹部と村民との矛盾へと変化し、村民が抱く国家への不満は、すなわち幹部への不満として表現されるようになっていった。こうして幹部たちは四清運動時に批判されるに至ったのである。例えば沙井村の支部書記張麟炳は次のように語っている。

「農村には幹部の仕事のやり方に対する不満があるのだ。村の幹部と郷の幹部は上部の言う通り遂行しているのにすぎないが、中央の精神をなんとか遂行しようとすると、大衆は異議を唱える。だが幹部はその異議が正しくとも中央に服従しなければならない。話を聞くわけにはいかないのだ。公社に従う、政府に従う、これこそが『政社合1』なのだ。」「上級は常に各種の会議を開いた。そこで何か言うと、下の方がすぐそれをやった。」この結果、幹部たちは批判されたのであった。(72)

寺北柴村で当時団支部書記であった劉宝貴は、1960年代の初め、食糧も少なかったころ、社員がトウモロコシやイモを盗むと、捕まえて木に縛り殴った。「そこで皆から恨まれた。四清運動ではそのような彼のやり方が問題とされたのだ。」(73)

と語っている。民兵の幹部劉鳳林も厳しく批判されたが、その原因は「集団化、特に大食堂の時代に、農家での食事を禁止し、農民達の鍋や釜を取り上げてしまった」ためであった。[74]

同時に、集団生産と生活のなかで、幹部は村落の様々な面まで管理しようとしたため、しばしば農民の恨みを買った。確かに徐孟祥が言ったように、「村の幹部は長年やっているので、恨みをかったものも多かったのだ。」[75] これについて、ほかの村民も同じ観点を持っていた。例えば徐は批判された原因について以下のようにいう。「幹部になったとき村民を厳しく管理した事が罪となった。中国農村では幹部をすれば、他の人から文句がでる。だれもずっと幹部などできない。」[76]「彼は長く勤めたから、不満をもつ人がいるのを免れなかった。」[77]「当時の幹部は別にたいした罪を犯さなくても、罪人とされた。」[78]

当時の会計劉連生も批判された。彼は次のように語った。

「長年会計をやって、人の機嫌を損ねたことがあったので、『四清』の時に私の帳簿を査定し、労働点数も査定された」。[79]

沙井村の幹部批判に関しても、元書記張麟炳によれば、大衆の不満はほとんど仕事上の態度に向けられた。例えば、「生産に関して、仕事を切り上げる時間に、私が隊長に『やめるな（仕事を続けろ）』と言ったことがある。すると皆は、何故仕事をやめてはいけないのかと言った。隊長は彼等に書記がやめるなと言ったからだと告げた。」[80] 張はこのことで批判を受け、書記をやめざるをえなかった。当時の会計劉振海は村の幹部が「仕事がうまくやれなければ罵られた。平時に管理が厳しいのも罵られた。やりにくい」のだと証言している。[81]

以上のように、四清運動中には国家政策を遂行し、厳格に管理したがゆえに「罪」を得たものが多かったのである。四清運動以降、一部の幹部は希望を失い、もはや幹部たろうとはしなかった。例えば寺北柴村の元書記徐候は四清運動で批判されたが、彼は幹部であることの辛さを次のように吐露した。「幹部をしていると、どうしても人の恨みを買うのだ。」なぜなら「扱う事柄のなかには皆の気持ちにそぐわないものもあり、人の恨みを買う」からである。「私は幹部のとき、いつも苦しい目にあわされた。しかも運動をする段になると、痛めつけられた。思えば辛く、結局無駄な仕事だった。何という苦しさだったろう。だからもう辞めた

のだ。」[82]

呉店村の田山は自身の経験を次のように語った。

「その頃（四清運動当時—筆者）、上級から入党の工作をされた。入党は２人の紹介がいる。しかし、私は入党しなかった。党員になれば幹部になることを意味した。幹部になればまた批判を受ける可能性があった。だから入党しなかった。」[83]

だが、多くの幹部は、幹部の職を務め続けた。沙井村の支部書記張麟炳は次のように語った。「その時は現在とは異なり別に怒りを覚えることは無かった。その時は、一心に国家のために、集団のために、うまくやること、この１つの目標だけを考えていた。」[84]

後夏寨村の王維章はインタビューに対し、次のように語っている。

「問：批判を受けた気持ちはどうだったか＝答：私は気にかけなかった。四清工作隊は共産党が派遣したものであり、私のやったことは共産党の事だからだ。私は気にかけなかった。」[85]

大部分の村落では、運動後にも村幹部の仕事は同じ人物がそのまま従事していた。村幹部のひとり馬鳳山はこれを「直しながら改めるということだった。」[86]と述べている。実は、上級は村幹部に対し硬軟両様の構えをとっていた。すなわち、村幹部は厳しく批判されたあとに、「誤り」を是正すれば、一部の者は幹部を続けられ、また一部の者は公社或は県の機関に転ずる事ができた。例えば、寺北柴村の劉宝貴は、「態度がよかったので、四清運動後は幹部にこそならなかったが、欒城県文教局の食堂で働いた。」[87] さらに、村落に災害があった時に、上級から救済糧を与えたときには、村の幹部には特別に配慮を加え、幹部用の食糧は村民へのものとは別に出された。[88] こうした「幹部保護」は、村幹部を国家のために動因する目的でおこなわれていたのである。

四清運動時、幹部の批判は２つの側面を持っていた。１つは、村落内の矛盾で、即ち幹部が汚職したがゆえに発生した、幹部と大衆との対立であり、もう１つは幹部が国家の代理人として村民を厳しく管理したために生まれた村民の幹部に対する不満の発露である。

四清運動以後、村幹部には２つの変化があった。まず第1に、国家権力と村落社会の間で、バランスを取られるようになったことである。運動中、村幹部は村民

から厳しく糾弾された。また、それまで彼らは国家政策を実直に執行していたが、工作隊からも批判された。このため彼らは、四清運動以後、以前のように国家の指示だけに従うのではなく、村民の意思も重視するようになった。その結果、「瞞産私分」（上納の減少のために、食糧の生産高を少なく報告し、その余りの部分を村内で配る）のようなことが起こるようになった。第2は「好人主義」（よい人になろうとして問題に目をつぶるようなあり方）を信奉するようになったことである。これは彼らが「幹部をしていると、どうしても人の恨みを買う」[89] と感じることがあったためである。これに対して寺北柴村の元書記徐春梅（県の高校を卒業して村に戻った四清運動以後の若い女性の支部書記で、後に、公社及び県の幹部になった）は、運動後の村幹部の最大の問題が「好人主義」であったと指摘している。「人の怨みをかうことを怖れ、仕事が大胆でないのだ。」「この村には、特別な問題はないのに、幹部達が『好人主義』に呪縛されていたのだ。」[90]

四清運動を境に、村落と国家の関係は大きく変化した。確かに、村幹部たちの構成自体に大きな変化はなく、幹部は幹部のままであった。しかし、かれらの国家に対する態度には変化が見られるのである。

土地改革から農業集団化運動に到るまで、中国共産党が育成してきた幹部たちは、中国共産党の指導に極めて従順であった。しかし、四清運動を経て、彼等は単なる国家権力の代理人としての役割を脱しはじめた。なぜなら、彼等は村落内の社会関係の中で生きていかねばならなかったからである。国家に依存するだけでは、村落の社会関係の中で排斥されてしまう。その時になって初めて彼らは自分が人民公社の幹部であるまえに、農民であった事に気づいたのである。四清運動以降、村幹部たちは村落の利益を代弁する存となっていった。こうして解放以来存在していた農民と幹部の断絶は修復され始めたのである。

四清運動は国家によって強力に推進された政治運動であり、批判対象とされた幹部も、動員された村民も、国家意思に従わなければならなかった。したがって村落の内部においてはこの国家権力に対抗しうる勢力は存在しなかった。しかしながら、この運動の過程において、もともとの共産党中央の意図は、村落内の具体的諸事情に規定され農村社会の基層部分では質的に異なるものとならざるを得なかったのである。例えば国家の階級闘争の対象はくつがえされた搾取階級、

地主、富農分子及びその代理人（一部の中国共産党幹部）であり、運動の内容はつぎの５点―即ち敵に対する闘争、社会主義教育、貧農下層中農の階級隊５の組織、「四清」、幹部の労働参加であった。しかしながら、村落内における最大の矛盾は階級闘争ではなく、幹部と村民との間の矛盾であった。こうして、運動を大々的に発動するために幹部への批判が運動の中心として祭り上げられることになったのである。

６．むすび

清末以降、華北の雑姓村において、村落の自律性は非常に低かった。その理由は村落のエリートと村民との間に断層があり、村落の中に民主的で平等な討議制度がなかったからである。そこには、村落結合における村民と支配層との矛盾が内包されている。幹部集団のみによる村政の運営に対して、普段村民はそれを冷淡に甘受している。もし我慢できないような事が起こった場合には県まで提訴し、国家権力の介入を求めた。

人民中国成立以後、国家権力は四清運動によって主動的に村落に介入した。これに対して村民は、この国家権力を借りて、幹部の汚職を摘発した。通常の政治的手続きに基づかない大衆運動の方式によって村落内の矛盾を解決しようとする場合、村幹部と村民との間の矛盾を徹底的に解決できず、村幹部はしばしば傷つけられることになった。人民公社体制の下では、村落内に民主的制度が導入されていなかったし、貧農下層中農協会も村民の代表機関ではなかった。四清運動において、工作隊は、一部の村民にとっては幹部に対抗するために利用しうる政治闘争の道具にすぎなかった。貧農下層中農協会の積極分子に対する村民の消極的評価はこのことを証明している。この運動の後、貧農下層中農協会の機能は次第に弱まっていった。このことから、人民公社体制下においても村落の幹部と村民との間の断層が依然として存在していたとしなければならない。村落の財務をめぐる指導部と一般村民との矛盾は一貫して華北村落の最大の問題である（1990年代に人民公社が解体された後も村民自治を実施する時の最大の問題も村費の公開であった）。こうした状況下で生じた村落財務をめぐる紛争は、村落内で民主的

且つ自律的に解決することはできないため、村民は県に提訴してその裁決を求めることとなった。村落秩序の維持は国家権力の介入から離れることはできなかったのである。

中国の村落社会と国家権力の間において、国家権力・村幹部・村民の三者は相互に対立しつつ、また依存していた。村幹部は村民の代表として国家権力と交渉する役割を担うだけでなく、村民が国家に反抗する際の直接的対象ともなった。村民は村幹部に自らの利益を代表させただけではなく、村幹部によって自らが損害を蒙った時には、国家権力の直接的介入による公平な裁決を求めた。従って、国家権力もまた村幹部を仲介役として村民との関係をとり結ぶこと以外に、村民との直接関係を保っていたことになる。国家権力は村落社会において統治者として現れるだけではなく、村民と幹部との間に争いが起こったときには公正な裁判官として現れる。近年の社会学研究者による華北村落でのフィールドワークの成果によれば、村民の観念における村民自治とは、統治の主体（すなわち国家権力）に対して物申すことではなく、村落中の権威に対して物申すことである。換言すれば、彼等村民にとっては村落内部に存在する末端の権威こそが村民の自治を脅かすものなのであり、そしてそれは国家権力の支持なしには達成されないのである。[91] 農民たちは、もっとも国家権力の行使を受けたくない存在は末端の権威たる村幹部であると考えている。それゆえ、現代華北農村において国家権力・村幹部・村民の三者は相互に牽制しあう関係にあり、村落秩序を維持するためには１つとして欠く事は出来ないのである。

田原史起は中国農村の村落の自己管理作用（生成的自治）と統治単位の果たすべき機能（構成的自治）の間には構造的な乖離があったとしている。氏は、近代国家はこの２つの「自治」の１体化を積極的に図り、村落の枠組みの「創造」を企図することになったと主張する。[92] しかしながら、この２つの「自治」は乖離する一方で、相互に依存もしていたのである。近現代の華北村落に内在する「自律」（自治）機能は、構造的欠陥（幹部と村民、宗族の間の断層）を内包する不完全な自律であった。それゆえこの「自律」には時として国家の上からの統治権力の介入が必要とされた。中国において近代国家が地方自治を実施したとき、村落内部に民主制度を建設しなかったため、村落内部における指導層と村

民、宗族の間の断層が基本的に埋められることはなかった。そのため、本来の「自律」は形成されなかったのである。人民公社のもとでも、村落における「自律」性は脆弱であった。このため、公社による村落の厳格な管理が行われたが、その一方で村落側から公社への介入を行うこともあったのである。国家権力にとっても、村落の要請に応えることが必要であった。四清運動のような政治運動を上から発動した場合、国家権力は、農民を動員するために、幹部の汚職・腐敗に対する批判を重点的にとりあげることによって、彼らに恨みを抱いている一部の村民を利用した。村落における人間関係を利用しない限り、国家権力はこの運動を順調に展開できなかったからにほかならない。

注：

(1) 毛里和子他編(1994)『原典中国現代史』、第1巻(政治上)、岩波書店、218頁。
(2) 前掲『原典中国現代史』、第1巻、220-221頁。
(3) 前掲『原典中国現代史』、第1巻、221頁。
(4) 有林他編(1993)『中華人民共和国国史通鑑』、第2巻、紅旗出版社、583頁。
(5) 前掲『原典中国現代史』、第1巻、224頁。
(6) 1966年9月、欒城県で「社会主義教育運動展覧会」が開催され、「四清によって没収された武器、弾薬、神像、卑猥な出版物など」が展示された。(欒城県地方志編纂委員会編(1995)『欒城県志』、新華出版社、58-62頁)。
(7) 欒城県の農民はこの運動の様子について次のように総括している。「国家が派遣してきた工作隊は貧農下層中農を発動して四類分子(地主・富農・反革命・右派)と貪汚幹部に打撃を与えた。帳簿や倉庫を検査して階級隊列を整頓した。さらに貪汚の類を清算した。」(三谷孝編(1999)『中国農村変革と家族・村落・国家―華北農村調査の記録』(以下『華北農村調査Ⅰ』)、汲古書院、1999年、298頁)。
(8) 大隊と小隊の幹部を批判して、食糧22万8869キロ、綿花2万3141キロ、落花生7588キロ及び現金3万5668元と現金3341元に相当する物資を没収した。9月に、省の「四清」工作団が県に来て、同県の「大四清」が開始された。そこでは多くの農村幹部が批判された。(平原県志編纂委員会編(1993)『平原県志』、斉魯出版社、30-31頁)。
(9) 三谷孝編(2000)『中国農村変革と家族・村落・国家―華北農村調査の記録』、第2巻(以下『華北農村調査Ⅱ』)、汲古書院、302頁。
(10) 静海県志編修委員会編(1995)『静海県志』、天津社会科学院出版社、439頁。
(11) 県と公社の幹部の「四不清」問題を摘発し、県機関の幹部はその場において現金2000元、食糧券25斤、自転車4台、腕時計17個、毛布4枚を没収した。1965年には各公社には四清工

作団を、各大隊には工作隊を派遣したが、その団員は主に中央機関、北京市の機関及び大学の教員と学生からなっていた。全県の運動の結果、2218人（その内訳は、公社幹部と教師233人、農村幹部と社員1985人）が処分された。その中には共産党に除名されたもの336人、党員登記を拒否されたものと離党勧告されたもの888人、公職辞退させられたもの197人、規律処分されたもの368人、反革命分子・悪質分子・汚職分子・不法投機分子とされたもの429人が含まれていた。その他、改めて地主・富農に認定されたのは44戸、没収された家屋は1442軒であった。（房山区志編纂委員会編（1999）『北京市房山区志』、北京出版社、421-422頁）。

(12) 前掲『中華人民共和国国史通鑑』、第2巻、584頁。

(13) 三谷孝編『農民が語る中国現代史』（以下『農民が語る』）、内山書店、1993年、178頁。

(14) 「1966年3月には1人の団長のもとに2、30人がやって来た。軍隊の人もいた。県城の人もいた。村ではそのために大食堂を運営した。」（『華北農村調査Ⅰ』、110頁）。

(15) その中で、「石家庄の橋東区から、県幹部が工作隊を40人以上組織して来た。」（『華北農村調査Ⅰ』、94-95頁）。

(16) 『華北農村調査Ⅰ』、110頁。

(17) 『華北農村調査Ⅰ』、94-95頁。

(18) 『華北農村調査Ⅰ』、84頁。

(19) 『華北農村調査Ⅰ』、89頁。

(20) 『華北農村調査Ⅰ』、97頁。

(21) 『華北農村調査Ⅰ』、191頁。

(22) 『華北農村調査Ⅰ』、635頁。

(23) その時、牛欄山に「大勢来ていて、各村の首脳はみな来ていた。1つの村から少なくとも10人、23の村から、都合3～400人来た。全公社の幹部がみな行ったのだ。」（『華北農村調査Ⅰ』、684頁）。

(24) 『華北農村調査Ⅱ』、273頁。

(25) 『華北農村調査Ⅱ』、82-83頁。

(26) 「工作隊が幹部の認識を高めるため学習するよう組織した。」（『華北農村調査Ⅱ』、90頁頁）。

(27) 当時の村幹部は「私たちを整頓する」ために来たのだと語った。（『華北農村調査Ⅱ』、302頁）。

(28) 『華北農村調査Ⅱ』、76頁。

(29) 『華北農村調査Ⅱ』、89頁。

(30) 『華北農村調査Ⅱ』、513頁。

(31) 『華北農村調査Ⅱ』、592頁。

(32) 『農民が語る』、110頁。

(33) 『農民が語る』、103頁。

(34) 『農民が語る』、119頁。

(35) 『農民が語る』、103頁。

(36) 『農民が語る』、178頁。
(37) 『華北農村調査Ⅰ』、331頁。
(38) 『華北農村調査Ⅰ』、331頁。
(39) 『華北農村調査Ⅰ』、331頁。
(40) 前掲『中華人民共和国国史通鑑』、第2巻、521-522頁。
(41) 前掲『中華人民共和国国史通鑑』、第2巻、620頁。
(42) 前掲『中華人民共和国国史通鑑』、第2巻、620頁。
(43) 『華北農村調査Ⅱ』、89頁。
(44) 以下の表は、『華北農村調査Ⅰ』、97、320、660頁、『華北農村調査Ⅰ』76、492頁、及び『農民が語る』110頁を参考にして作成した。
(45) 『華北農村調査Ⅰ』、184頁。
(46) 『華北農村調査Ⅰ』、660頁。
(47) 『華北農村調査Ⅱ』、76頁。
(48) 『華北農村調査Ⅱ』、492頁。
(49) 中共中央『当前の農村工作のなかでのいくつかの問題についての決定草案(前十条)』1963年5月20日。(前掲『中華人民共和国国史通鑑』、第2巻、620頁)。
(50) 『華北農村調査Ⅱ』、89頁。
(51) 『華北農村調査Ⅱ』、88頁。
(52) 『華北農村調査Ⅱ』、89頁。
(53) 『華北農村調査Ⅱ』、391頁。
(54) 『農民が語る』、178。
(55) 徐小眼へのインタビュー。(『華北農村調査Ⅰ』、152頁)。
(56) 当時の生産隊長徐丑小へのインタビュー。(『華北農村調査Ⅰ』、261頁)。
(57) 『華北農村調査Ⅰ』、298頁。
(58) 『華北農村調査Ⅰ』、320頁。
(59) 『華北農村調査Ⅰ』、684頁。
(60) 『華北農村調査Ⅰ』、741頁。
(61) 『華北農村調査Ⅰ』、659頁。
(62) 『華北農村調査Ⅱ』、80頁。
(63) 『華北農村調査Ⅱ』、302頁。
(64) 『華北農村調査Ⅱ』、302頁。
(65) 『華北農村調査Ⅱ』、543頁。
(66) 『華北農村調査Ⅱ』、592頁。
(67) 『華北農村調査Ⅱ』、492頁。
(68) 『農民が語る』、110頁。
(69) 『農民が語る』、125頁。
(70) 『農民が語る』、193頁。
(71) 『華北農村調査Ⅱ』、211頁。

(72) 『華北農村調査Ⅰ』、669-670頁。
(73) 『華北農村調査Ⅰ』、95頁。
(74) 『華北農村調査Ⅰ』、97頁。
(75) 『華北農村調査Ⅰ』、185頁。
(76) 劉風書へのインタビュー。(『華北農村調査Ⅰ』、97頁)。
(77) 『華北農村調査Ⅰ』、172頁。
(78) 劉継晨へのインタビュー。(『華北農村調査Ⅰ』、93頁)。
(79) 『華北農村調査Ⅰ』、231頁。
(80) 『華北農村調査Ⅰ』、669-670頁。
(81) 『華北農村調査Ⅰ』、700頁。
(82) 『華北農村調査Ⅰ』、338頁。
(83) 『農民が語る』、104頁。
(84) 『華北農村調査Ⅰ』、669-670頁。
(85) 『華北農村調査Ⅱ』、76頁。
(86) 『華北農村調査Ⅱ』、80頁。
(87) 『華北農村調査Ⅰ』、97頁。
(88) 『華北農村調査Ⅱ』、309-310頁。
(89) 『華北農村調査Ⅰ』、338頁。
(90) 『華北農村調査Ⅰ』、334頁。
(91) 張静(2003)「村庄自治与国家政権建設—華北西村案例分析」、『中国郷村研究』、第1輯、商務印書館。
(92) 田原史起(2000)「村落統治と村民自治」、天児慧・菱田雅晴編『深層の中国社会』、勁草書房。

Power and Village in the Siqing Movement

Jianmin Qi *

This article revealed the ruling relationship that the national power and the grass - roots unit of countryside both conflicted and rely on each other through the analysis of the Siqing Movement in the grass-roots unit of countryside. The data received of the investigations and interviews from the five villages lying north of China during the 1990s. Actually at the beginning the Siqing Movement was a class struggle movement brought out by the center of the communist party, but at the end it became a movement to fight against corruption and aimed to the leaders of the villages. It was achieved by the involvement of three groups, namely, the Siqing working team which was sent out by the center of the Chinese Communist Party, the associations of the poor and lower-middle class peasants, the cadres of the villages. The leaders of the countryside took a conciliated way to resolve the conflict between the power of the country and the benefits of the countryside after the Siqing Movement by resisting from the policy of the country definitely.

* Assistant Professor of College of History of NanKai University (china) ; Foreign Researchers of Japan Society for the Promotion of Science